

聖書：ダニエル 11：2～45

説教題：ついに彼の終わりが来て

日時：2015年2月15日

11章はダニエル書の中で最も読むのに忍耐が必要な箇所ではないかと思います。ダニエルはこの時、エルサレムに帰還した同胞が困難に直面していることを知って3週間断食し、神のあわれみと導きを祈り求めています。そんな彼の祈りに答えて、これから神の民はどのような歩みをたどるのか、神は真理の書に書かれていることを教えてくださいました。それはダニエルが正しい展望と慰めを得るためです。同じく私たちもここから正しい展望と慰めを与えられたいと思います。

さて天的存在は10章20節で、ペルシャの後にギリシャが来ると言っていました。第1の区分となる11章2～4節ではペルシャとギリシャの時代のことが述べられています。ペルシャとギリシャについては8章の幻でも語られました。そこでも述べたように、今日の章3節の「ひとりの勇敢な王」はアレクサンドロス大王のことと思われまます。しかし彼の死後、国は四つに分割されます。後継者争いの戦争を経て、カッサンドロスがマケドニヤを、リュシマコスがアナトリアを、セレウコスがシリヤを、そしてプトレマイオスがエジプトを治めるようになります。

さて今回の焦点は、その後の時代にあります。第2の区分は5～20節です。ここでは南の王と北の王の戦いのことが述べられています。南の国はプトレマイオス朝エジプト、北の国はセレウコス朝シリヤを指します。ここは忍耐して読むととても興味深いことが分かります。何と実際の歴史と驚くほど一致するのです。一例として最初の5～7節を見たいと思います。ここに南の王と北の王の関わりが述べ始められています。6節の和睦をするために北の王に嫁いだ南の王の娘はプトレマイオス2世の娘ベルニケという人でした。北の王アンティオコス3世には先にラオディケという妻がいましたが、政略結婚のために離婚してベルニケと結婚します。ところがプトレマイオスが死ぬと、北の王はこの結婚を解消し、元妻ラオディケとよりを戻します。つまりベルニケは競争相手に敗れるのです。それが「彼女は勢力をとどめておくことができず」と6節に書かれてあることの意味です。するとラオディケは夫が再びベルニケを愛することがないように夫を殺してしまいます。これが「彼の力もとどまらない」の意味です。そしてベルニケもその関係者も殺されます。まさしくシナリオ通りです。

ダニエルがこの幻を受けたのはペルシャの王クロスの第3年すなわち紀元前536年でした。その時に200年以上も先の時代のことがこれほどに正確に語られています。そしてこの後で語られることも歴史上で全くその通り起こっています。そのため、聖書を信じない人々は、これは事が起きてから書いたのではないかと言います。数百年

も先のことをこんなに詳しく書けるはずがない！と。しかし保守派はきちんとした議論を経た上で、この幻はダニエルの時代すなわち紀元前 6 世紀のものであるとの伝統的立場を堅持しています。これは聖書に示されている神の姿に何ら反しないものです。イザヤ書 44 章 6～7 節：「イスラエルの王である主、これを贖う方、万軍の主はこう仰せられる。『わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。わたしが永遠の民を起こしたときから、だれが、わたしのように宣言して、これを告げることができたか。これをわたしの前で並びたててみよ。彼らに未来の事、来たるべき事を告げさせてみよ。』」

さて 5～20 節ではどんなストーリーが語られているのでしょうか。まず 5～6 節で言われていることは、南の王が強くなるが政略結婚はうまく行かなかったということです。しかし 7 節では一つの芽が起こって、エジプトが北の国シリヤに勝つと言われています。エジプトの優勢は 10 節以降も続きます。しかし雲行きが怪しくなり、15 節でついに北の国シリヤが勝ちます。しかし 17 節でシリヤは国の総力をあげてエジプトに攻め入ろうとするも成功しません。18 節で「鳥々に顔を向けて」すなわち地中海・ギリシャへの進出を図るも敗れてしまいます。20 節では別の一人が起こって力を発揮しますが、彼も思わぬ仕方で破られます。これらのストーリーは何を言いたいのでしょうか。結局どっちが勝ったのか良く分からず、フラストレーションがたまって来ます。しかしまさにそれこそ、ここのメッセージでしょう。すなわち南の王も北の王も決定的な勝利を得ません。一方が一時優勢になりますが、絶頂に差し掛かっただと思われるところで敗北します。そして今度は相手が力をたくわえてもう片方を飲み尽くそうとするところまで行きますが突然倒されます。これは一言で言ってむなしい歴史ではないのでしょうか。ハバクク書 2 章 13 節：「これは、万軍の主によるのではないか。国々の民は、ただ火で焼かれるために勞し、諸国の民は、むなしく疲れ果てる。」これは神の民にとっては慰めを与えるものです。ある国が一時優勢を誇っても、いつまでも続くのではない。どんなにある国とある王が栄えて自らを誇っても、それは一時的なものではない。やがてその国と王に終わりが来る。神は全部そのことを知っておられる。そしてこれらの後に永遠に続く神の国が現れることになるのです。

次の第 3 の場面は 21～35 節です。21 節に「ひとりの卑劣な者が起こる」とあります。これは 8 章に出て来たセレウコス朝シリヤの王アンティオコス・エピファネスのことです。彼は正統的な王位継承者ではありませんでしたが、巧言を使ってこれを手に入れます。そして南の国エジプトを征服する寸前まで行きます。24 節の「不意に州の肥沃な地域に侵入し」とか、25 節の「大軍隊を率いて南の王に立ち向かう」は、そのことを示しています。ところがうまく行かない様子が 28 節までに書いてあります。29 節から彼は 2 度目の遠征を企てます。しかしキティムの船（ここではローマ軍）が立ち

向かって来たため断念します。そこで彼はそのいらだちと怒りをユダヤに向けます。これにより、神の民たちに厳しい迫害が生じます。22 節に「契約の君主もまた、打ち砕かれる」とありますが、これは大祭司オニアスが紀元前 171 年に失脚させられた時のことを指すと思われます。28 節に「彼の心は聖なる契約を敵視して」とあります。そして 30 節に「聖なる契約にいきりたち、ほしいままに振る舞う」とか、「聖なる契約を捨てた者たちを重く取り立てる」とあり、31 節にこう記されます。「彼の軍勢は立ち上がり、聖所ととりでを汚し、常供のささげ物を取り除き、荒らす忌むべきものを据える。」 実際、アンティオコス・エピファネスはエルサレムを破壊し、多くのユダヤ人を処刑します。律法遵守を禁止し、聖書の写本を焼き、エルサレム神殿にゼウスの神を祭って、これを拝むように要求します。紀元前 167 年のことです。この迫害によってある者たちは墮落します。その一方、堅く信仰にとどまる者たちもいます。そしてその者たちが剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れるという仕打ちを受けます。

なぜこの幻はこのことに焦点を当てて語っているのでしょうか。それはこのような苦難の日が来ることを前もって警告するためでしょう。ダニエルはイスラエルの今後のことを案じて祈っていました。しかし天の使いは苦難はまだまだ民に臨み得ると示したのです。しかしここには励ましも散りばめられています。24 節：「それは、時が来るまでのことである。」 27 節：「まだ定めの時にかかっているからだ。」 29 節：「定めの時になって、彼は再び南へ攻めて行くが、云々」 35 節：「それは、定めの時はまだ来ないからである。」 確かにひとりの卑劣な者による圧政は厳しいものとなるが、その活動は無制限ではない！わずか 10 年程度の彼の働きがこんなにも強調して述べられているのは、それだけこの期間の苦難が厳しいものとなるからですが、しかしその彼でさえ神の下にあるのです。神こそがすべてを御手に治め、事を導いておられるお方なのです。

最後、第四の場面が 36 節以降です。ここはアンティオコス・エピファネスの話の続きのように見えますが、40 節以降は史実と合わなくなってきました。そしてここは彼を超えた存在について語っているようです。というのは、この幻は 12 章 4 節まで続きますが、12 章では復活のことなど地上の歴史の後のことが述べられます。従ってこの 11 章最後の部分は世界の歴史の最終局面について語っているものと見ることができます。おそらくここではアンティオコス・エピファネスと重ね合わせる形で、歴史の最後に現れる究極的な神の敵対者のことを述べているのでしょう。36 節に、この王はいよいよ高ぶり、神よりも自分を高め、あきれ果てるようなことを語るとありますが、II テサロニケ 2 章 4 節に不法の人についてこう言われています。「彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を

設け、自分こそ神であると宣言します。」そして 41 節にあるように、麗しい国すなわち神の民に多くの苦難が臨むようになります。しかしそのクライマックスが 45 節にあります。すなわち彼の働きの絶頂期に、突然、終わりの日がやって来る。アンテオコス・エピファネスもそうでしたが、彼が指し示す究極の一人にもついに終わりが来る。彼を助ける者は一人もいない。歴史はこの終局に向かって進むのです。そして次回の 12 章で、主を待ち望む者にどのような報いが与えられるかが述べられることになるのです。

ここから私たちは何を学ぶことができるでしょう。それは何と言っても、神の主権と支配は実にこれほどのものであるということでしょう。紀元前 6 世紀のダニエルからすれば、この幻は 200 年も先のギリシャのこと、その後のエジプトとシリアの争いのこと、さらに 350 年も先のアンテオコス・エピファネスのことまで述べています。しかも大枠だけでなく、非常に詳細な点まで述べています。聖書を信じない人たちが、「これは当然終わってから書いたんでしょう？」と思わず考えてしまうほどの正確さです。これは神の前に不確かなことは何一つないということです。今日、私たちも不穏な世界の動きの中で、ともすれば心乱されがちです。様々な国が様々な形で自分たちの権力や力を誇示しています。今後世界はどうなるのか。どの国がサバイバルするのか。我々も負けないようにどのように先手を打つべきか。まさに明日はどうなるか分からないような状況です。しかしここに私たちは改めて教えられます。主に知られていないことは一つもないということを。主にとって想定外のことは一つもなく、すべてがすでに主に知られている。いや単に知っているだけでなく、主はあらゆることを完全に掌握し、コントロールしている。ここまでは来ても良いが、これ以上はいけない、と。このような奇しく聖なる御手を主は持つておられるのです！

このことはこの主を信じる者には、良いことばかりが起きるということは意味しません。ダニエルはこの時、イスラエルが直面していた困難に悩んでいましたが、この後の歴史もそうだと示されました。16 節、28 節。特に 32~34 節がそうです。主に従う忠実な者たちが長い間、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れる。彼らへの助けは少ないと言われる状況がある。しかしだからこそ、この幻は必要なのです。

その苦難の中で、私たちがこの幻から学ぶ慰めは何でしょうか。それは神の前に高ぶる者の終わりは突然やって来るということです。「高慢は破滅に先立つ」と箴言にあります。まさに高慢の後に破滅がやって来ます。この書でもネブカデネザルやベルシャツアルがそうでした。そして今日の幻でもそうでした。12 節に「南の王の心は高ぶり」と記されましたが、この不吉な言葉の後に彼の終わりが来ました。16~17 節でも北の王が思うままに振る舞うようになった時、倒れました。20 節の一人の人もそう

です。そして45節の究極の一人もそうです。ですから私たちは苦しい中に置かれ、ある権力の座につく者がいよいよ高ぶり、無敵と思われる状況があっても、希望を抱くことができるのです。すなわちその人に突然、終わりが臨み得る。絶頂と思われる時に、突如そのことが神のさばきとして起きる。神はそのように歴史を導かれることがこの幻に示されています。

そしてもし、私たちの生きている間にそのことが起こらなくても、この幻を通して私たちが持つ慰めは、最終的なさばきが必ず行なわれるということです。45節にあるように最後にはこれが来る。究極の一人が現れてしたい放題のことをし、世界と私たちを恐怖に陥れても、彼の絶頂期に最終的にさばきが臨む。神はその最後の日に向かって今日も歴史を導いておられます。私たちの生活のすべては、その詳細に渡って、この神の主権的支配の下にあります。どんな国や王や悪の力が世界を圧倒的な力で支配しているように見えても、その国やその王やその力が主権を持っているのではない。「しかし、ついに彼の終わりが来る。彼を助ける者はひとりもない。」そして忠実に歩んだ者に次章で見るように報われる日が来ます。「大空の輝きのように輝く」日が来るのです。